素晴らしき一週間，そして未来へ

名古屋市立大学病院　福間宙志

今回，私はスタンフォード大学にて 1 週間の研修を行う機会を得た．この研修への動機は現在の先端技術の動向を知ること，そして狭くなりがちであった自分の視野を広げ，より多角的に我々の仕事を見つめなおすということであった．講義は先端の放射線技術を含む内容であった．そして現場の診療放射線技師との交流，米国における医療を取り巻く環境について，さらには起業した方々の話まで聞くことができた．

日米の放射線技師の違いについて

今回の研修には 2 つのテーマがあった．1 つは「日米の放射線技師の違いについて」．日本ではローテーション，宿日直などでほぼすべてのモダリティを使用することが多いが，米国では撮影，CT，MRI，治療のようにモダリティごとのライセンス制度となっており，それぞれの技師の仕事の守備範囲が明確になっていた．これは専門性を高くすることができ，かつ個人のライフスタイルを両立させることができるシステムであると感じた．しかし，一方で病院としてはスタッフを多く雇わなければならず，日米の医療事情の違いがバックグラウンドにあるものと感じた．さらに研究という面で考えると日本の研究者は臨床をこなしながら，研究を行っている方々が多いと思われ，時間的，物理的，精神的に大きな負担になっていると思われるが，それと同時に，より現場に近い視点からアイデアを生み出すことができるというアドバンテージでもあると感じた．

診療放射線技師の国際的視野

もう 1 つのテーマは「診療放射線技師の国際的視野」について．グループ討議も行われ，様々な意見を聞くことができた．そして各学会においても様々な取組がなされているようである．日本において最も壁になると思われるのが英語能力の取得である．しかし英語能力の取得により，より多くの経験や知識を取り入れ，独自のシステムを構築することができる．そして，環境や言語にとらわれず，同じ医療という分野の中で情報を交換し切磋琢磨することが重要である．それが医療全体の質を向上させ，世界中の人々により良い医療を提供するためのプロセスであると考える．

この研修をきっかけに，グローバルな視点から捉えることの重要性を学ぶことができた．さらに多くの会員がこのような機会を得られますよう願っています．

最後に本研修にご尽力下さったモズレー先生はじめ，GEHC-J の方々，JSRT 関係者の方々と共に学んだ仲間達，そして快く研修に送り出してくださった当院，中央放射線部諸兄に深くお礼を申し上げます．

左から筆者，Moseley 先生とグループの仲間たち